

第2章 武士の活躍と信仰



紀伊国の荘園



時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代 昭和(戦後)・平成時代

荘園の成立と分布

743(天平15)年、^{ちやうてい}朝廷は荒れた土地を^{かいこん}開墾した者に対し、その土地の私有を認める^{こんでんえいねん し ざいほう}墾田永年私財法を制定しました。この法律によって、貴族や大寺社を中心に土地を私有する動きが広まっていきました。こうして出来上がった私有地のことを^{しやうえん}初期荘園と呼びます。ただ、この時期に成立した荘園の多くは、外から人を呼び寄せて^{かいこん}開墾し、定住する人がいなかったこともあって、10世紀には^{すいたい}衰退しました。

11世紀頃からは、荘園の中に、人々が生活する集落だけでなく、人々が信仰する寺や神社、水田を切り開くための山野などを含み込んだ新しいタイプの荘園が増えていきました。このような荘園は、姿を変えながらも戦国時代の終わりごろまで存続しました。

荘園の領主は様々です。^{わだ}和太(和太)郷などの^{ごう}日前国懸宮(日前宮)領は、神社を中心とした^{なぐさ}名草郡(和歌山市)にあり、神社を中心に領域がはっきりしています。^{だいでんぼういん}大伝法院(後の根来寺)領は、^{かくぼん}覚鑑の時から引き継がれ、^{な が いわで}那賀郡石手荘、^{ひろた}山崎荘、^{ひろた}弘田荘、^{いわた}岡田荘(ともに岩出市)や^{さんどう}名草郡山東荘(和歌山市)、^{い と}伊都郡相賀荘(橋本市)などが含まれてまいす。^{おうが}京都の^{いわし みずはちまんぐう}石清水八幡宮も^{すだ}伊都郡隅田荘(橋本市)、^{ともぶち}那賀郡^{きみの}輦淵荘(紀の川市)、^{あま え な}野上荘(海南市・紀美野町)、^{ひだか}海部郡衣奈荘(由良町)、^{そのたから}日高郡^{むろ は や}蘭財荘(御坊市)、^{むろ は や}牟婁郡^{は や}芳養荘(田辺市)など、多くの荘園を支配し、石清水八幡宮の分社となる八幡社がつくられました。また、^{い わうち}日高郡石内荘(御坊市)、^{いちばら}西牟婁郡^{いわた}櫛原荘、^{かみとん だ}石田荘(ともに上富田町)など^{せつかん}摂関家の荘園は、熊野街道沿いにありました。

紀ノ川流域の荘園

紀伊国には多くの荘園が設けられましたが、とりわけ紀ノ川流域には大小様々な荘園が数多く成立しました。これは、紀ノ川流域が古代より南海道がつくられて人の行き来が活発だったことや、^{じやうり せい}条里制に基づく水田の開発が進められたことなどにより、早くから豊かな生産力を誇っていたからと考えられます。そのため、高野山や^{こかわ}粉河寺・日前国懸宮など地元の寺社だけでなく、石清水八幡宮・摂関家など京都の大寺社や公家が、自分たちの荘園を次々つくっていきました。

なかでも、現在の橋本市西部から九度山町北部にかけての地域に位置した高野山の^{かんしやう ふ しょう}荘園官省符荘は、紀伊国でも最も早く成立した領域のはっきりした荘園です。1049(永承4)年、高野山はそれまで紀伊国内に分散して存在していた寺地を返上する代わりに、伊都郡内の^{な こ ぞ}名古曾・大野(ともに橋本市)周辺のまとまった地域を自らの荘園とすることを国に認めてもらいました。これにより高野山は山下にある地域から



慈尊院(九度山町)

* 1 藤原氏の中で摂政・関白を出す家柄。



まとまった年貢をとることができるようになったため、非常に支配がしやすくなりました。高野山は慈尊院（九度山町）に政所と呼ばれる現地の役所をたて、官省符荘を支配しました。政所は、紀ノ川流域にある荒川荘・名手荘（ともに紀の川市）などの高野山の荘園や、備後国（広島県）・筑前国（福岡県）・遠江国（静岡県）などにある高野山の荘園から運ばれてくる年貢を、川船から馬に積み替えて、高野山まで運び上げるための中継点でもありました。

市の成立

荘園内部の生産が増え、流通も増えて、産物の取引の中心となったのが市です。鎌倉時代になると官省符荘・相賀荘・名手荘・荒川荘・神野荘（紀美野町）・三上荘（海南市・和歌山市）などで市が開かれています。

市は、交通上の重要なところに開かれました。たとえば、三上荘大野市場は、熊野街道と高野街道が交わり、近くに名高・日方などの港がひかえる交通の要所です。鎌倉幕府のもとでは、湯浅党などの武士が荘園内に地頭を認められて力を振るいましたが、市場の管理者としては、これらの武士が活躍しています。神野市場では貴志氏一族の志賀野信正、大野市場では湯浅党の保田浄智などがいました。

運送業の発達

和歌山市内に「船所」という地名が残っています。この地は中世の紀ノ川河口の重要な地にあたり、国府の船所か、あるいは船所に属する機関が置かれた場所が地名に残ったのです。国府の船所は、紀ノ川を往来する船から通行税を取る権利を持っていました。

高野山の荘園から運ばれてくる年貢は、紀ノ川河口の紀伊湊（和歌山市）の倉庫に集められ、紀ノ川をさかのぼって高野政所へ運ばれました。たとえば、高野山領南部荘（みなべ町）の年貢米300石は梶取の手によって紀伊湊まで運ばれています。この梶取は年貢輸送の運賃の支払いを受ける鎌倉時代の運送業者でした。「梶取」は和歌山市の地名ともなっています。

荘園と農民たち

荘園で暮らす人々は、時には荘園領主の力をかりながら、また、時には自分たちの力で、用水路やため池をつくって、新たな水田開発に取り組みました。紀伊国内で中世に造られたと考えられる用水路やため池としては、柿田荘（かつらぎ町）の文覚井や荒川荘の安楽川井、魚谷池（紀の川市）や引の池（橋本市）などがあります。



井上本荘絵図（随心院蔵）



神野・真国荘絵図（神護寺蔵）

こうした新たな水田開発は、隣り合う荘園同志の激しい争いを起こす原因ともなりました。たとえば、現在の紀の川市を流れる名手川をはさんで隣り合う名手荘と粉河荘（ともに紀の川市）では、名手川の水をどちらが優先的に利用できるかをめぐり、長い間にわたって激しい争いを繰り返しました。

荘園で暮らす人々にとって、山野は肥料となる草木を得るための場であったため、荘園の境界地帯に位置する山野では、隣り合う荘園どうしで境目をめぐって激しく争いました。こうした争いに勝つために、荘園領主はみずからの主張を裏付ける証拠として、荘園絵図と呼ばれる地図を作らせることがありました。紀伊国内の荘園に関しては、紀伊国井上本荘絵図（紀の川市）や紀伊国神野・真国荘絵図（紀美野町）などがよく知られています。これらの荘園絵図は、こうした境界争いや開発をめぐる争いの中で作成されたと考えられています。



【栲田荘】

教科書などによく載せられている栲田荘は、伊都郡の西部、現在のかつらぎ町笠田東、笠田中、萩原などを中心とした地域にあたります。

栲田荘は、平安時代末期ごろは京都の三十三間堂の名で知られる蓮花王院の荘園でした。やがて、1183（寿永2）年に後白河法皇が、文覚の働きかけに応じて京都の神護寺へ寄進して神護寺領の栲田荘となりました。正式に手続きを行い、荘園として成立したのが1184（元暦元）年で、このときに有名な神護寺所蔵の荘園絵図が描かれたと考えられています。

この絵図を見ると、八幡宮（現在の宝来山神社）や堂（現在の神願寺）、『万葉集』で名高い妹山・背山、紀ノ川の中にある船岡山など、現在もその位置が明らかにできるものが描かれています。

荘園の範囲は、静川によって区切られており、絵図ではほぼ四角形となっていますが、実際は三角形に近い形の荘園です。荘園の境となる傍示（石や杭などで境界を示したもの）は、絵図では5か所の黒点で示されています。そのうち最も特徴的なものは、紀ノ川の南で高野山領志富田荘と接したものです。これは紀ノ川の流れの変化の問題もあって、高野山と所有を争っていたために念入りに記されたものと考えられます。

荘園絵図は、栲田荘の西部の水田地帯からぐるりと周囲を見渡した感じで、樹木や山々が水墨画風に描かれています。集落も「大道」沿いや山沿いの4か所ほどが描かれていますが、静川から取り入れられた中世の用水路である「文覚井」は記されていません。

また、地元の宝来山神社にも同じような絵図と1491（延徳3）年の荘園の範囲を示す文書が残されており、神護寺の絵図と同じように国の重要文化財に指定されています。



栲田荘絵図（宝来山神社蔵）

* 1 鎌倉時代前期の真言宗の僧。

* 2 絵図は二つあり、神護寺の絵図では5か所の黒点があるが、宝来山神社の絵図では、省略されて2か所になっている。

第2章 武士の活躍と信仰



源平の争乱と紀伊国



時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
	昭和(戦後)・平成時代

平氏政権と紀伊国武士団

平安時代後半、武士が次第に勢力を伸ばし、1156（保元元）年に起こった保元の乱では、源氏・平氏の2大武士団が、大きな役割を果たしました。そして、源氏と平氏は対立するようになりました。1159（平治元）年、平清盛は熊野詣を行い、切目（一説に田辺の二川）に着きました。ここで清盛は、平氏を快く思っていなかった源義朝らが反乱を起こしたとの知らせを受けました。わずかな兵しかそばにいなかった清盛は、どうするか思案しました。この時、清盛を助けたのが湯浅党の宗重と、熊野別当湛快です。彼らの支援を得た清盛は、ただちに都に帰って反乱をしずめ、平氏政権を打ち立てることができました。

平氏は一族で朝廷の高い地位を独占し、武士でありながら貴族のように振る舞いをするため、朝廷・貴族・武士の中で、平氏に対する反発が強まりました。1180（治承4）年、後白河天皇の皇子以仁王が平氏打倒のため決起しましたが、それを平氏に伝えたのは田辺の湛増（湛快の子）でした。

諸国の源氏に平氏打倒の挙兵を呼びかける以仁王からの命令を届けたのが源行家です。行家は新宮で暮らしていたので、「新宮十郎」と呼ばれました。また、源義経の家来として有名な武蔵坊弁慶も、田辺出身と伝えられています。弁慶と源義経の話は有名ですが、その話の多くは確認されていなく、弁慶の一生は今も謎のままです。

湛増と熊野水軍

1180（治承4）年8月半ばに湛増は平氏を見限り、反平氏の兵を挙げました。湛増の軍は牟婁郡を越えて、有田郡と日高郡の境にある鹿ヶ瀬山まで兵を進めました。湛増の挙兵は、源頼朝や義仲の挙兵よりも



闘雞神社（田辺市）

早いものでした。湛増は戦いを起こし、実力で熊野三山を動かそうとしたのです。しかし、前から仲が悪かった弟の湛覚が城に立て籠って抵抗を続け、新宮の本家出身の別当範智も湛増の行動を支持しなかったため、湛増の作戦は行き詰まりました。1181（養和元）年1月ころから湛増は作戦を変えて、平氏の本拠地であった伊勢・志摩地方（三重県）に水軍を送り、ここで戦いを続けました。湛増の水軍に加わったのは、平氏支配の強まりによって自由を奪われた熊野の海で生

活する人々でした。戦いが有利になるにつれて、熊野三山での湛増の力が強まり、抵抗できるものはいなくなりました。新宮本家の跡取りと言われていた行命も平氏を頼って逃亡しました。そして湛増は、1184（元暦元）年に熊野別当に就任しました。

熊野三山を統一した湛増は、水軍を率いて源氏の軍に加わりました。しかしその時期は、屋島の戦いが終わった後の1184年のことです。熊野水軍の支援を得た源義経は、1185（文治元）年、壇ノ浦で平氏を滅ぼしました。湛増の行動について『平家物語』には、源氏につくか平氏につくか決めかねた湛増が、田辺に新熊野社（現在の闘雞神社）で、白い鶏（源氏の白旗の象徴）と赤い鶏（平氏の赤旗の象徴）とを闘わせて、白い鶏が勝ったことから、源氏の軍に加わったと記しています。湛増ははじめから平氏に反抗していますから、これは作り話と見られています。湛増と熊野水軍を味方につけ、壇ノ浦の戦いに勝利した源義経の手腕に、当時の人々が神の力を感じていたため、このような伝説が生まれたと考えられます。

平維盛伝説

源平の争乱にまつわる伝説と言えば、平維盛の話があります。屋島の戦いの時に平氏の陣から脱出した平維盛は、父重盛の家来であった滝口入道をたずねて高野山に登り僧になった後、熊野へ参詣し、浜の宮王子（那智勝浦町）から船乗り入水したと『平家物語』に記されています。事实は、父重盛と親しかった湯浅党を頼って、維盛・忠房兄弟が紀伊国に逃れたようで、湯浅党は忠房をかくまい、源頼朝の命令を受けた湛増と戦っています。

源平の争乱では源氏につかなかった湯浅氏は、源頼朝と親しかった僧文覚のとりなしもあって、1185年には御家人となりました。一方の湛増ですが、平氏滅亡後、源頼朝と対立した義経・行家と親しかったためか、1194（建久5）年になって頼朝に許されました。



わかやまの知識



【道成寺縁起】

道成寺には、室町時代に作られたといわれる絵巻物『道成寺縁起』が残されています。絵巻物の詞書（絵巻物に書き添えられた文言）には、安珍と清姫の名はなく、奥州（東北地方）の若い美しい僧と牟婁郡真砂に住む清次荘司の女房となっています。

この物語の起こりは古く平安時代にさかのぼり、『大日本国法華経験記』や『今昔物語』などには「寡婦」「悪女」と書かれているだけで、安珍も鎌倉時代の『元亨釈書』には見えますが、その後に書かれた『道成寺縁起』には出ていません。

江戸時代になって、「御伽草子」や道成寺物とよばれる歌舞伎舞踏や人形浄瑠璃などが盛んになるとともに広がりしました。修行のさまたげとなる女性とその誘惑に負けた修行者のみじめな姿をえがいているのです。



道成寺縁起（江戸時代後期 和歌山県立博物館蔵）

第2章 武士の活躍と信仰



湯浅党と隅田党



時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
	昭和(戦後)・平成時代

湯浅党

湯浅党は、湯浅荘を本拠とし、血のつながりを中心とした武士集団です。その勢力は紀ノ川流域から紀南地方の一部まで拡大し、紀州最大の武士団に成長していきます。

1185（文治元）年に、湯浅宗重が鎌倉幕府の御家人となり、湯浅荘の地頭となって以来、宗重の子供や孫などが有田川流域の荘園の地頭となって根を張っていきます。湯浅荘の須原氏、広荘の広氏、石垣荘の得田氏、糸我荘の糸我氏、保田荘の保田氏、阿弓川荘の阿弓河氏などで、荘園名や村落名などを名字として名乗っていました。また宗重は、娘と有田郡田殿荘の崎山氏、海部郡木本荘の木本氏、有田郡藤並荘の藤並氏などとの結婚を通じて湯浅党を拡大させました。さらに紀ノ川流域の那賀郡田仲荘からは田仲氏を養子に迎えて湯浅党の一員としていました。

湯浅党は本家（惣領家）宗重の長男宗景の系統から石垣氏、阿弓河氏、伊都郡柿田荘の柿田氏や那賀郡貴志荘の貴志氏（保田氏の養子）など多くの氏族を生み出して勢力をほこっていたようです。遠隔地の湯浅党としては、牟婁郡芳養荘の芳養氏、本宮の本宮氏、名草郡の六十谷氏、勢多氏、伊都郡の相賀の生地氏などがありました。このうち芳養氏以外は湯浅党としては血のつながりがない氏族のようです。このように鎌倉期の終わりごろには、湯浅党は本拠の有田郡以外にも、広く血のつながりのない氏をも組み込んでいたことがわかります。

1221（承久3）年の承久の乱後、朝廷の監視や京都の警備と西日本の御家人統率のための役所である六波羅探題の北条氏との関係が深くなりました。北条氏は、後に紀伊国守護を兼ねましたので、湯浅党は兩使という六波羅探題の命令を実際に紀伊国内で行使する重要な職務につきました。



湯浅景基 寄進状（施無畏寺蔵）

隅田党

伊都郡の 隅田党は、1247（宝治元）年の宝治合戦後に、紀伊国守護が北条重時の系統に交代したときから北条氏の家来になったようです。隅田党は湯浅党と比べて規模も小さく有力な農業経営者である名主層とあまり変わらない存在でした。党としては、血のつながりよりも土地の結びつきを優先したような武士団でした。

隅田荘の荘園領主は京都の石清水八幡宮であり、守護の北条氏が地頭で隅田氏は地頭代についています。隅田荘には、荘園ができたころから隅田八幡神社が創建され、隅田党の精神的なよりどころとなっていました。

鎌倉時代、隅田党の本家は六波羅探題の北条氏に仕え、京都で六波羅検断方と呼ばれる警察業務の責任者として活躍しました。1332（元弘2）年、後醍醐天皇の倒幕計画に味方した河内国（大阪府）の楠木正成が隅田荘を攻めました。このことは隅田党が幕府方の武士団としてあなどりがたい存在だったからと言えます。1333年、鎌倉幕府が滅亡しますが、そのとき六波羅探題北条仲時らは鎌倉へ逃れようとし、隅田氏もこれに同行しました。しかし、近江国番場（滋賀県米原市）で後醍醐天皇方に包囲され、蓮花寺で全員が自害して、隅田党の本家は滅びました。

本家が滅亡した隅田党は、南北朝時代に構成員であった葛原氏や上田氏などを中心に再結成され、情勢に応じて南朝についたり北朝（室町幕府）についたりしていました。隅田党は南北朝の動乱を通じて紀伊国守護との結びつきが強くなり、室町時代には守護畠山氏の家来になりました。そして、畠山氏に従って、京都や伊勢国（三重県）などで活躍する者も出てきました。

室町時代の隅田党は、官省符荘の荘官であった高坊氏・亀岡氏・塙坂氏などといった政所一族を構成員に加え、名草郡和佐荘（和歌山市）にも進出しました。その勢力は、1512（永正9）年に、300名参加の能の上演会を利生護国寺（橋本市）で催すほどでした。このような隅田党も、検地や刀狩といった近世への動きの中で、ほとんどの者が農民となりましたが、一部は「地土」（郷土）として生活しました。



わかやまの知識



【佐藤氏と西行法師】

平安時代、那賀郡の田仲荘（紀の川市）に本拠をおく佐藤氏という武士の一族がいました。佐藤氏は、平将門をたおした藤原秀郷の流れをくみ、仲清・能清親子の代に平家の家来となって勢力を強めました。紀ノ川をはさんで南となりの、当時高野山の荘園であった荒川荘（紀の川市）に、兵をひきいれて乱暴をした事件は、よく知られています。

わが国を代表する歌人の1人である西行法師は、この佐藤氏の家に生まれました。もとの名を義清といい、仲清の兄にあたり、一度は家を継いでいたようです。兵衛尉に任命され、鳥羽上皇の身辺を守る北面の武士にも選ばれるなど、都の武士としての将来は約束されていましたが、1140（保延6）年、突然髪を切って僧となりました。同僚の武士の突然の死に、世の無常を感じたことが、原因とされています。

その後、京の東山や嵯峨野、伊勢などにすみ、高野山にも長く庵をかまえました。諸国をめぐる「遍歴の歌人」として、特に花や月などの自然をよんだ美しい和歌をたくさん残しました。『新古今和歌集』に多くの歌が選ばれています。代表的な歌集には『山家集』があります。

第2章 武士の活躍と信仰



明恵と覚心



時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
	昭和(戦後)・平成時代

明恵（高弁）

明恵（高弁）は1173（承安3）年、平家の有力な家来であった平重国を父とし、湯浅宗重の娘を母として、石垣荘吉原村（有田川町）で生まれました。1180（治承4）年、相次いで両親を亡くした明恵は、母方の伯父にあたる上覚を頼って京都の神護寺に入り、華嚴宗（奈良時代からある仏教の1つ）の僧になるための修行をはじめました。

1195（建久6）年、故郷に戻った明恵は、白上峰（有田川町）で修行生活に入りました。この後明恵は京都に戻りましたが、神護寺で争いがおこったことに嫌気がさし、再び紀州にくかりました。明恵は湯浅宗重の保護を受けながら、白上峰から後立（有田川町）、糸野（有田川町）、星尾（有田市）、神谷（有田川町）へと移って、修行と仏教の研究を行い、いくつかの書物を書きました。

明恵は1206（建永元）年、後鳥羽上皇から京都梶尾の地を与えられて高山寺を開き、上皇や多くの貴族たちの信仰を得ました。

明恵の考え方の特徴に、「菩提心」と呼ばれる自らの悟りを求める心を重んじたことにあります。ほぼ同じ時代に浄土宗を開いた法然が、ひたすら念仏を唱えて阿弥陀仏に救いを求めたこととは対照的な考え方で、事実明恵は、法然の考えは「菩提心」を誤って理解していると批判しました。

明恵は生涯にわたって自分のみた夢を記録しつづけたようです。明恵が書き残した『夢記』は、最も古い夢の日記とされています。

1231（寛喜3）年、明恵は白上峰のふもとに湯浅党の森（須原）景基が建てた施無畏寺の開山となりました。明恵と湯浅氏の関係は、高山寺を開いてから後も変わりませんでした。明恵が没した後、弟子たちによって誕生の地である栖原に歓喜寺が建てられましたが、これを援助したのも湯浅氏でした。

無本覚心（法燈国師）

覚心は、1207（承元元）年、信濃国（長野県）に生まれました。戸隠神宮寺で学び、東大寺で正式な僧になったあと、高野山に入りました。高野山では、金剛三昧院の退耕行勇のもとで禅宗を学ぶとともに、密教の教えも身に付けました。1249（建長元）年、覚心は宋（中国）に渡り、本場の禅宗を学びました。5年後に帰国した覚心は、再び高野山の金剛三昧院に入り、後にはその寺の住職となりました。

そのころ、北条政子から与えられた由良荘（由良町）に葛山景倫願性という人がいました。願性は鎌倉



明恵画像（鎌倉時代、京都市高山寺蔵）

幕府3代将軍 源 実朝^{みなもととのさねとも}の家来でしたが、実朝が暗殺されたのち、その冥福^{めいふく}を祈るため僧となり、自分の領地であった由良莊^{さいほうじ}に西芳寺^{さいほうじ}（現在の興国寺）という寺をつくって住んでいたのです。願性は高野山で覚心に出会い、その人柄や教えに強く引かれて、覚心を西芳寺に招きました。覚心も願性の願いを快く受け入れ、西芳寺の中興開山となりました。

晩年覚心は、上皇や貴族から京都に招かれ、教えを授けたり寺を開いたりしましたが、名誉や地位を求めず、都に長くとどまろうとしませんでした。92歳でなくなるまで、由良の西芳寺で暮らし、彼の教えはその死後も、弟子たちによって、臨済宗法燈派^{りんざいしゅうほうとうは}として受け継がれてゆきました。覚心の「法燈国師」という名は、後醍醐天皇^{ごだいごてんのう}が授けた「諡」です。寺名も興国寺と改めました。

編笠^{あみがさ}に尺八^{しゃくはち}という姿で托鉢^{たくはつ}にまわる虚無僧^{こむそう}で知られる「普化宗^{ふけしゅう}」を日本にもたらしたのは覚心であったと伝えられ、興国寺は虚無僧の寺として知られています。また、覚心が宋から径山寺味噌^{きんざんじみそ}（金山寺味噌）の作り方を学んで帰った話や、醤油^{しょうゆ}をつくる方法を発見したという伝説もよく知られています。



覚心坐像（興国寺蔵）



わかやまの知識



【粉河寺縁起】

粉河寺^{おこ}の興りについて絵と文章とであらわした「粉河寺縁起^{こかわでらえんぎ}」は、出来ばえのよさと平安時代末期という描かれた年代の古さによって、たいへん有名な絵巻物で国宝に指定されています。

大伴孔子古^{おほとものくじこ}という獵師^{りょうし}が、獵の途中、山の中なかで光を放つ場所を見つけ、そこに小さなお堂^{どう}をたてました。ある日、孔子古の家を少年の修行者^{しゆぎやうしや}がたずねます。泊めてもらったお礼に本尊^{ほんぞん}をつくる約束^{やくそく}をしてお堂にこもりました。8日目の朝、お堂に修行者の姿はありませんでしたが、立派な観音さまの像ができあがっていたのでした。

その後、河内国の長者^{かわち ちやうじゃ}の娘^{ひふ}がひどい皮膚病にかかりました。いろいろ手をつくしますが、やまいは少しもよくなりません。そこにまた少年の修行者があらわれました。かれが加持祈禱^{かじきとう}を行うと、不思議なことに娘のやまいはすっかり治りました。修行者は、お礼の品をことわり、「粉河に住む」とだけ言い残して立ち去りました。次の年、粉河をたずねた長者とその娘は、修行者の正体が孔子古のお堂の観音さまだったことに気づき、ありがたさのあまり、そろって髪^{かみ}を切って仏の道にはいったのでした。

このお堂が、今の粉河寺になったと伝えられています。



粉河寺縁起（部分）（平安時代後期 粉河寺蔵）

第2章 武士の活躍と信仰



地頭の横暴と悪党



時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
	昭和(戦後)・平成時代

阿弋川荘の農民たちの訴状



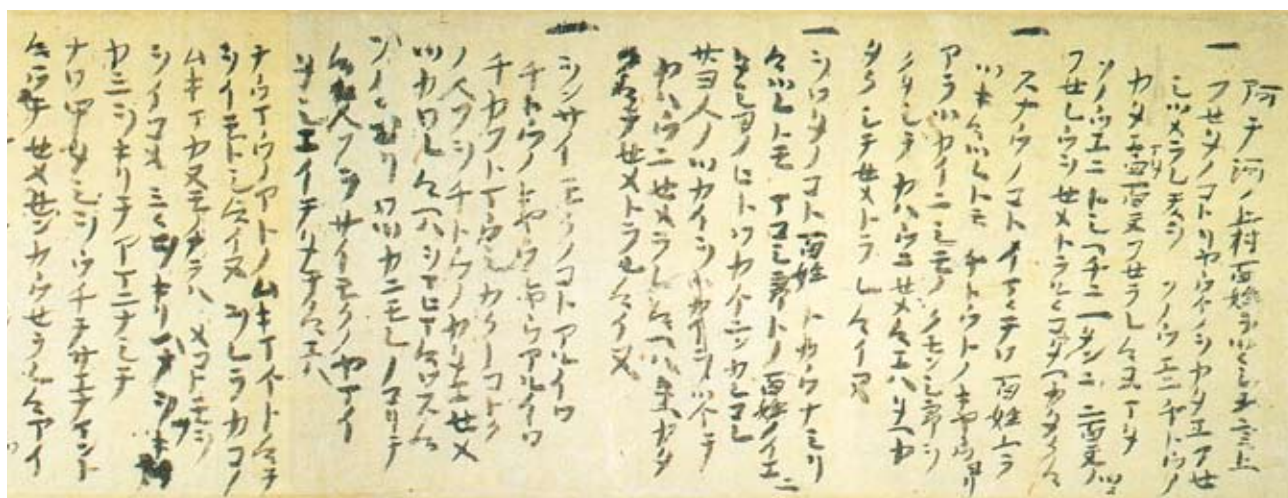
かつての阿弋川荘のあたり（有田川町）

現在、^{おうぎがた}扇形に広がる美しい^{たな}棚田・^{あらぎ}蘭島のあることで知られる^{ありだ}有田川町の東部は、中世においては、^{あてがわ}阿弋川荘と呼ばれる^{しやうえん}荘園でした。1275（建治元）年、阿弋川荘の農民たちは、^{えんまんいん}荘園領主の円満院に対して、^{じとう}地頭の^{ゆ あさむねちか}湯浅宗親が行った^{おうぼう}横暴の数々を13か条にまとめて、これをやめさせるよう求める^{そじやう}訴状を提出しました。この訴状はほとんどがカタカナで^{しる}記されていて、農民たちが自分たちの言葉で、^{うた}地頭の横暴を訴えている様子がたいへんリアルに伝わってきます。また、カタカナで書かれているとはいっても、使われている言葉やその文法は、方言や口語が使われることはあっても、誤った

使われ方をしているものはほとんどなく、当時の農民たちがたいへん高い言語能力をもっていたことがうかがえます。この訴状は国宝に指定されており、歴史の教科書にもよく掲載されています。

この訴状の第4条目には、およそ次のようなことが記されています。

「領主に納めるべき材木のことにについて、地頭が様々な仕事を私たち農民にさせようとするので、材木を



阿弋川荘上村百姓等片仮名書申状（高野山金剛峯寺蔵）

切り出しに行く時間がありません。私たちが、村に残ったわずかな人手で材木を切り出しに行こうとすると、地頭は『逃亡した百姓の畑に麦を蒔け。さもないければ、おまえらの妻や子どもたちを捕らえて牢に入れ、耳を切り、鼻を削ぎ、髪を切って尼のようにし、縄で縛って拷問するぞ』と脅すので、材木の納入はますます遅れてしまいます。』

農民たちはこうした地頭の横暴を訴えることで、それをやめさせ、自分たちの生産活動に安定を取り戻そうとしました。カタカナで書かれたこの訴状からは、阿弭川荘の農民たちが置かれていた苦しい状況とともに、それに毅然と立ち向かう農民たちの力強い姿がまざまざとみてとれます。

荒川荘の悪党たち

阿弭川荘の農民たちに横暴な振る舞いをした湯浅宗親という武士は、鎌倉幕府に仕える御家人でもありました。しかし、鎌倉時代の後半になると、御家人ではない、新しいタイプの武士があちらこちらで力を伸ばし始めてきました。なかには、鎌倉幕府の命令に従わず、荘園領主に納めなければならない年貢を

横取りしたり、村や町を焼き払うなどして、荘園領主や幕府から「悪党」と呼ばれた人々もいました。

13世紀の終わりごろ、紀伊国荒川荘（紀の川市）では、源為時をリーダーとする巨大な悪党集団が大きな力をもっていました。彼らは、荒川荘だけでなく、近隣の吉仲荘や名手荘（いずれも紀の川市）など

で活動する親類や豪族的な武士たちとも強いネットワークをもち、紀ノ川を通じた物資の運搬や商業にも密接に関わる商人的武士団でした。その意味で彼らは、土地からの収益に頼る今までの武士団とは明らかに性格の異なる、まったく新しいタイプの武士団でした。彼らに対する「悪党」という呼び名は、古い体制を維持しようとする保守的な一部の高野山寺僧らからみた一方的な言い方であって、彼ら自身が文字通りの悪者というわけでは決してありません。

また、こうした悪党の中には、熊野の海賊なども含まれていました。

源為時の勢力範囲



荒川荘の中心に位置する三船神社（紀の川市）

第2章 武士の活躍と信仰



南北朝の動乱と紀伊国

時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
	昭和(戦後)・平成時代

護良親王と倒幕運動

鎌倉幕府に対する不満が高まった14世紀前半、後醍醐天皇は幕府を倒す計画をすすめていきました。天皇の計画を実現させるために、倒幕の兵を集めようとしたのが護良親王（大塔宮）です。護良親王は紀伊半島の山間部を中心に活動したので、この地方には親王についての言い伝えが残っています。護良親王は1332（元弘2）年に熊野に対して倒幕に協力するよう求めたのをはじめとして、全国各地の武士にも、同じような命令を出しています。河内国（大阪府）の楠木正成も護良親王に味方して倒幕の兵を挙げましたが、このとき、幕府方として楠木正成を攻撃していた湯浅党も、その後、幕府を倒す側につきました。

後醍醐天皇は1333年、足利尊氏や新田義貞の協力によって鎌倉幕府を倒し、建武の新政をはじめました。しかし、武士と公家とはめざしていた政治が違っていたため、倒幕に協力した人々の間で争いがはじまりました。さらにもと鎌倉幕府の残党も加わって、1334（建武元）年の飯盛山（紀の川市）をはじめ、各地で反乱が occurred。この反乱と前後して、足利尊氏と対立していた護良親王は捕えられて、鎌倉（神奈川県）で殺害されました。

守護畠山国清と熊野水軍

武家政治の復活をめざして後醍醐天皇と対立した足利尊氏は、光明天皇をたてて、京都に室町幕府を開きました。後醍醐天皇は吉野（奈良県）に逃れて足利尊氏に対抗したため、京都（北朝）と吉野（南朝）に朝廷が並びつ南北朝の動乱がはじまりました。

紀伊国は吉野に近いえに、護良親王の倒幕のよびかけに味方した武士も大勢いたことから、南朝方が有利な地域とみられていました。そこで足利尊氏は、紀伊国の南朝を従えるために、足利一族の畠山国清を守護として派遣しました。畠山国清は紀北地方一帯を支配しましたが、南朝方の湯浅党がよりどころとする有田郡から南に軍をすすめることはできませんでした。したがって、紀伊国の守護の力は紀南にまでは及びませんでした。

紀南の熊野水軍は、関東から九州まで行動し、そのときどきの動きに応じて、幕府（北朝方）についたり、南朝方についたりしながら活動していました。1347（正平2）年には、南朝方についた熊野水軍が、遠く薩摩（鹿児島県）まで出かけて、幕府（北朝方）の城を攻撃しました。これとは反対に、幕府（北朝方）から瀬戸内海の人や荷物を運ぶ権利を認められた人たちも熊野水軍のなかにいました。

南朝の復活と山名氏の紀伊国平定

南北朝の動乱は、楠木正成や新田義貞ら南朝の有力な武士が戦死したこともあって、しだいに幕府（北朝方）が有利になっていきました。ところが、幕府の中では、鎌倉幕府の守護・地頭のようなしくみで治

* 1 鎌倉・室町時代、各国で軍事などを担当した職名のこと。



古戦場のひとつである龍門山（紀の川市）

めていこうとする勢力と、一気に古い社会のしくみを崩してしまおうとする新しい勢力の対立が激しくなり、ついに幕府は分裂してしまいました。そのため、幕府が頼りにならないと思う人々が紀伊国でも増加し、南朝方へ味方するようになりました。たとえば、1362（正平17）年の、粉河寺領丹生屋村（紀の川市）と高野山寺領名手荘（紀の川市）の間での灌漑用水をめぐる争いは、南朝方が裁判を行いました。このように紀北・紀南をとわず幕府の勢力が後退し、南朝方が大きく勢力を伸ばしてきました。

足利義満が3代将軍についてからは、室町幕府は、各地で南朝方を圧倒していきましたが、紀伊ではなかなかうまくいきませんでした。そこで幕府は、1378（永和4）年、山陰地方を中心に大きな勢力をもつ山名氏を紀伊国に派遣しました。紀伊国守護についた山名義理らは、紀北地方一帯を支配し、その結果、紀伊国の南朝で中心となって活躍していた湯浅党は力をなくしていききました。1391（明德2）年、山名一族は将軍足利義満に反抗して討たれましたが（明德の乱）、すでに南朝に力はなく、全国的な戦乱になりませんでした。このときまでに南北朝の動乱は終わっていたのです。南北朝は翌1392年に一つとなり、戦乱の時代はひとまず終わりました。



わかやまの知識



【後南朝と紀伊国】

南北朝の動乱が終わった後、室町幕府（北朝）が和睦の条件を守らなかったため、それを快く思わなかったもと南朝側の人々が、勢力回復運動をしました。その動きを「後南朝」と言います。紀伊半島は南朝の重要な拠点でしたので、後南朝についての言い伝えや史料が見られます。

1443（嘉吉3）年、後南朝が宮中に侵入し、三種の神器の一つである八坂瓊曲玉を北山へ運び去る事件を起こしました。その際、玉置徳増が後南朝を手引きした罪で処罰されています。玉置氏は将軍直属の室町幕府奉公衆ですが、以前からの南朝との関係が絶ちがたかったようです。

那智勝浦町の色川には、「乙亥」の年号が記された忠義王の文書が残されています。忠義王は南朝ゆかりの王子と言われ、「乙亥」の年は、1455（享徳4）年と言われています。このように、南北朝合体から60年以上が過ぎても南朝の勢力が紀伊半島には残っていたことが分かります。八坂瓊曲玉が赤松氏の家臣らによって京都に帰るのは、1458（長祿2）年のことでした。

応仁の乱の際、後南朝は西軍に味方して挙兵しますが、大勢を覆すことはできませんでした。南北朝合体から80年近くが経過し、世の中が変わって、南朝が認められることはなかったのです。



色川文書

第2章 武士の活躍と信仰



農民の闘いと高野山

時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
	昭和(戦後)・平成時代

官省符荘の農民の訴状

高野山寺領荘園でもっとも古い中心的な荘園として官省符荘があります。この荘園は高野山の玄関口にあり、全国の高野山寺領荘園の年貢などを集める場所でした、そして荘園支配の拠点として「高野政所」が存在しました。この強力な荘園であった官省符荘も南北朝時代という内乱の時代を過ぎた頃から、しだいに支配がゆらいでいき、遠方の荘園の年貢などを「高野政所」に集めるのが困難になりました。南北朝の内乱の時には地元の荘園ですら武士の権限が強まり、荘園内の武士も荘園領主に仕えながら、守護大名の被官(家来)にもなって、しだいに守護大名との関係を強めました。

官省符荘でも守護大名の権力を背景に土地調査を計画しましたが、なかなか実現することができないでいました。14世紀末に紀伊国の守護大名となっていた大内義弘の時代に、ようやく土地調査が実施できました。一方、荘園内に住む農民も、このころ生産力を高めて実力をつけていました。例えば、池の築造や管理なども鎌倉時代には荘園領主の手で行われていましたが、南北朝時代から室町時代にかけて、農民の手で行うようになり、村単位で責任をもって行動する体制もできてきました。

こういった時代背景の中で農民の手によって官省符荘の武士であった荘官の不正を告発して書かれたのが、1396(応永3)年の「官省符荘百姓等申状」というもので、荘園領主の高野山に45か条にわたって書かれています。告発された荘官は、武士団の中心となった「高野四荘官」と呼ばれた高坊氏、田所氏、亀岡氏、岡氏の四氏でした。告発状は片仮名が多く使われているとは言え、主要な文言には漢字を使うなど、鎌倉時代の「阿弋川荘上村百姓等片仮名書申状」と比べると表記上にはずいぶん違いがあります。しかし、約120年の開きがあるものの、告発した内容には共通したものを感じさせます。ただ、文字そのものはずいぶん書きなれた様子であることから、闘う農民の力量も高まっていたことがわかります。

この官省符荘の申状の内容を一部具体的に見ると、「荘官方が守護大名から課せられた京都への夫役を、今まで課せられたことがありませんでした。しかし、近年は村ごとに高坊殿と亀岡殿が京都へ上がるたびに課せられるので、田畑耕作にも差し支えが出てきて、高野山への夫役へも困難となってきています」などと、荘官を告発する一方で高野山の出方をうかがうような表現が所々みられます。荘官の館の堀を掘ったり塀を塗るなどに動員すること、荘官屋敷の上棟式に村ごとに酒を押し売りすること、荘園の祭りの時に猿楽などの見物席を設けて見物料を強要すること、村落の住民に種々名目を付けて税を取ること、用水が必要な時に荘官が勝手に自分の田に水を引くので他の水田が干上がってしまうことなど、荘官の圧迫を種々告発しています。

この「百姓申状」が書かれたのは、1396年の6月です。この年は1394年11月から始まった荘園の土地調査が完了する時期にあたります。農民もこの土地調査に協力し、これを歓迎していたことは、この申状の中に、「この調査が終われば、荘園の諸事が昔のように改められると聞いているので、百姓は安心してい



高野枡 (かつらぎ町教育委員会保管)

ます。荘官たちがしているひどいことを止めさせていただければ、高野山のためにもめでたいことだと思います」などと記されていることからわかります。荘園内の土地調査は、すべての人々の協力が必要でした。

高野枡の制定

「百姓申状」には、農民の要求として、「枡のことは、昔のように高野山上に置く分と、荘園の現地に置く分と一つずつ、高野山側の責任者の花押を入れて決めて下さい」とあります。この要求に

従って作成された枡が現存していますから、農民の活動の成果があったことがわかります。

農民から告発された荘官たちも一枚岩ではなく、守護大名との関係をより強くして行こうとする高坊氏や亀岡氏、守護大名との関係よりも高野山との関係を重視していた岡氏などに分裂していました。このことが「百姓申状」に反映されていることから高坊氏や亀岡氏に対する告発の方が厳しかったようです。また、荘官の下で荘園内の軍事や警察の仕事を担当した殿原と言われた有力農民も、土地調査完了後の1396（応永3）年8月に高野山に対して誓約書を提出しています。官省符荘では、1367（正平22）年に高野山から奉行を派遣していた引の池の改修を、1384（元中元）年には、村の責任において改修していることからこういった動きを読み取れます。

枡については、領主側が制定したものとは別に、村々の取引に使われた市場の枡も登場しています。官省符荘では「高野政所」前に名倉市場があり、ここで使用された「名倉判枡」は戦国期に民衆によって決められていたことが記録されています。これをモデルとした枡も荘園内で使われていたことから、当時の民衆の生活力を知ることができます。



わかやまの知識



【「御手印縁起」について】

高野山には、空海が朝廷から認められたとする寺領を示した書き付けと絵図が伝えられていました。これを一般に「御手印縁起」と称しています。これには北は紀ノ川南部から東は大和国宇智郡（奈良県五條市）の丹生川、西は貴志川、南は有田郡阿弓川（有田川町）付近まで及んでいます。これは空海の開山当時の寺領を正確に示したものではなく後世の作です。いつ作成されたものかははっきりしていませんが、11世紀末ごろまでに作成されました。これが高野山から天皇家に渡り、1159（平治元）年に美福門院（鳥羽上皇皇后）の手によって高野山へ寄進されたものとされています。以後、高野山の寺領を拡張するための根拠とされ、1333（元弘3）年に後醍醐天皇によって、この縁起を承認してもらい、高野山は紀ノ川河南の地の拡大に成功しています。

これが高野山寺領の根拠として使われた最後は、豊臣秀吉の紀州攻め後の高野山領の確定で、紀ノ川北部の高野山領は取り上げられています。

* 1 名前をデザイン化したサインのこと。

第2章 武士の活躍と信仰



鞆淵の惣



時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代 昭和(戦後)・平成時代

鞆淵動乱と八人御百姓

鎌倉時代の終わりころから、^{しょうえん} 荘園や村では、惣と呼ばれる農民たちの自治的な組織が作られ、生活や生産、祭礼などに^{かか} 関わるさまざまな取決めが、住民たち自身により決められていくようになりました。中でも鞆淵荘の惣では、高野山や鞆淵氏一族との間で「鞆淵動乱」と呼ばれる激しい闘いを、繰り広げたことでよく知られています。

鎌倉時代の終わりから室町時代にかけて、鞆淵荘には2つの勢力が存在していました。ひとつは、^{むらまち} 荘園領主であった石清水八幡宮に奉仕する^{いわし みずはちまんぐう} 神人と呼ばれる^{ほうし} 特権集団を中心にした勢力で、石清水八幡宮から送られてきた神輿を心の拠り所とし、^{みこし} 鞆淵荘内で最大規模の用水路を開発するなど、水田開発にも積極的に取り組んでいました。一方、もうひとつの勢力は、後に鞆淵氏を名乗る武士の一族を中心に、それに従う農民たちをも含み込んだ勢力で、^{ほんきよ} 鞆淵氏の本拠地周辺で綿や苧麻の栽培などに取り組んでいました。

鞆淵氏を中心とする勢力は、南北朝時代に入るところから急速に力を伸ばしはじめ、同じころ、鞆淵荘の



国宝の神輿（鞆淵八幡神社蔵）

新しい荘園領主となった高野山と協力して、^{けんちゅう} 検注と呼ばれる土地調査を行うことによって^{ねん ぐ ちようしゅう} 年貢徴収を強化しようとした。これに対し、古くから鞆淵荘で生活を営んできた神人を中心とした勢力は、石清水八幡宮領時代の^{のうにゅう} 年貢額以上の納入には応じない姿勢を貫き、^{はちにんおんぎやくしゅう} 「八人御百姓」と呼ばれるリーダーたちを中心に激しく反発しました。これが鞆淵動乱です。高野山はこの「八人御百姓」を^{しゅぼうしや} 動乱の首謀者と認定し、^{しよぼつ} 処罰するためにその身柄を拘束しましたが、^{み がら} 神人たちは惣のために勇敢に戦い、また日ごろから人望もあつかった彼ら八人の^{しゅぼう} 身柄を取り戻すため、^{もど} 巨額の身代金を支払って彼らを解放させたのです。結局、高野山は、彼ら神人勢力の主張を認め、鞆淵荘につかの間の平和がおとずれました。

鞆淵氏と高野山

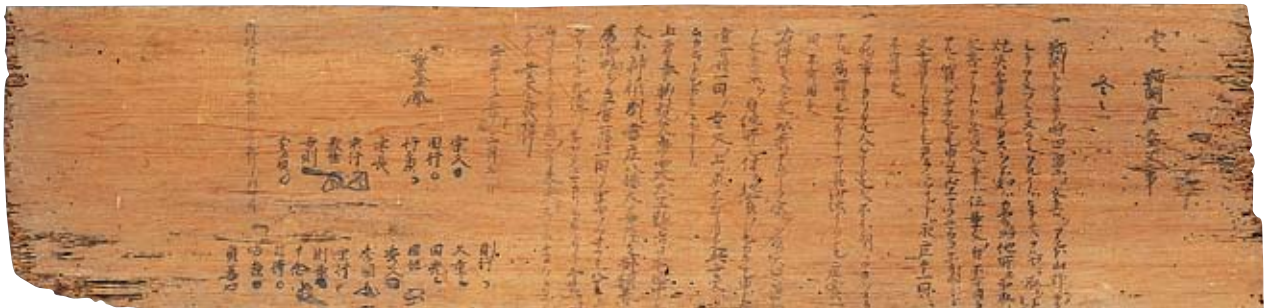
鞆淵動乱がおさまると、^{しゅ ぐ} 鞆淵氏は紀伊国の守護である^{はたけやま} 畠山氏の家臣としての活動が多くなり、次第に高

野山との関係も悪くなっていきました。高野山は、
 頼淵氏を通じて守護からかけられる夫役などの税
 が、頼淵荘の農民たちを苦しめていると判断し、
 1424（応永31）年、もとの神人勢力を中心とする
 農民たちが一斉に荘内を逃散したことを受けて、頼
 淵範景の追放を決定しました。

しかし、追放の決定を受けた後も、頼淵範景は何
 度も頼淵荘内に出入りしていたばかりでなく、その
 後も、高野山に対し綿・苧麻の納入を請け負うなど、
 頼淵荘内で一定の地位を保ち続けます。高野山に
 とっても、頼淵荘の円滑な支配のためには、地域社
 会に深く根を下ろした頼淵氏の力は不可欠のものとな
 っていました。頼淵の惣は、頼淵動乱とその後の
 逃散事件を経て、新たな領主である高野山ではなく、
 地元に深く根を下ろした頼淵氏やその配下の人々と
 共存する道を選んだのです。現在でも頼淵氏の城跡
 に祀られている神社の祭りが、毎年4月に静かに続
 けられています。



石清水八幡宮によって開発されたと考えられる用水路



頼淵惣荘置文（頼淵八幡神社蔵）



わかやまの知識



【粉河荘東村の名付け帳】

紀の川市東野にある若一王子神社では、毎年、正月になると、その前年、氏子たちの家に生まれた男子の名前を帳面に記入していく「名付け」と呼ばれる伝統行事が行われています。この帳面のことを「名付け帳」と呼び、1478（文明10）年以来、現在まで絶えることなく書き継がれたものが長大な巻物となって残されています。名付け帳は、室町時代の惣を実質的に運営していた宮座の実態を知る貴重な史料で、その他の中世の古文書とともに黒箱と呼ばれる木箱に収納されて伝えられてきました。現在では、国の重要有形民俗文化財となっています。

* 1 荘園領主や武士の支配に反発して居住地を離れ、年貢を納めないこと。

第2章 武士の活躍と信仰



守護大名と奉公衆・寺社勢力



時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代 昭和(戦後)・平成時代

紀伊国守護畠山氏と寺社勢力

山名義理の後、紀伊の守護となったのが中国との貿易で豊かになった山陽地方の大名大内義弘です。その大内義弘も1399（応永6）年、足利義満と対立して滅ぼされ、畠山基国が守護となりました。基国はかつて紀伊国守護であった畠山国清の甥で、当時は将軍を助ける管領であり、紀伊のほかに河内（大阪府）、越中（富山県）などの守護を兼ねる有力な守護大名でした。

室町時代の紀伊国が他の国と違うところは、高野山・粉河寺・根来寺・熊野三山（本宮・新宮・那智）など、寺院や神社の勢力が強いことでした。これらの寺社は、地元には多くの荘園を持ち、独自の武力も持って、強力な支配を行っていました。1418年には、守護畠山氏の軍と熊野三山の軍が、田辺の支配をめぐって衝突し、守護方が大敗しました。また、1460（長祿4）年には、守護の軍と根来寺との間で、灌漑用水の使用をめぐって戦いになりましたが、これも守護方が敗北しています。このように寺社の武力は、守護畠山氏にとって、たいへん手ごわいものでした。

奉公衆湯河氏

畠山氏は基国の後も、1573（天正元）年に室町幕府が滅びるまでの間、紀伊国の守護大名でした。そのため、次第に畠山氏の家臣となる武士が増えていきました。

しかし、南北朝の動乱の途中から幕府方についた湯河氏は、当時守護の力が弱かったこともあって、直接将軍の家臣となりました。湯河氏はもとは道湯川（田辺市）を根拠地としていましたが、南北朝の動乱の間に、小松原（御坊市）に進出しました。有力な武士として活動した手取城（日高川町）の玉置氏、竜松山城（上富田町）の山本氏も湯河氏と同様に、将軍の家臣となりました。直接将軍の家臣となった地方の武士を奉公衆といいます。

奉公衆は京都で将軍の護衛を行ったり、守護大名が大きな力を蓄えて、幕府に逆らわないよう監視する役目を持っていました。奉公衆は守護の力が及ばない支配地域を持っていました。紀伊国は奉公衆や寺社勢力が強かったため、守護畠山氏は十分に力を伸ばせませんでした。

湯河氏は日高平野を一望できる山の上に亀山城を築き、そのふもとに普段生活するための館を築きました。多くの戦国大名は、山城とふもとに館を築いていますので、湯河氏の計画は、



湯河氏の居城であった亀山城跡と小松原館跡（御坊市）

戦国大名と同じものといえるでしょう。戦国時代の湯河氏は、日高郡から有田・牟婁郡へと勢力を拡大していきました。

応仁の乱と紀伊国

15世紀の中ごろ、8代将軍足利義政のときに、畠山氏の跡継ぎをめぐり、義就と政長の間に争いがありました。これがひとつの原因となり、1467（応仁元）年、畠山義就と政長が京都で戦ったのをきっかけに、応仁の乱が occurred。紀伊も畠山氏が守護だったことから戦乱にまきこまれましたが、根来寺や湯河氏を味方につけた政長方が、有利に戦いを進めました。



畠山氏の守護所跡（現養源寺）

15世紀中ごろの紀伊国では、政治が大きく変わることになりました。それとともに紀伊の守護所は、紀北の大野（海南市）から紀中の広（広川町）に移されました。守護所とは、守護が領国の支配を行うために設置した役所です。移転の理由は、15世紀半ばには守護の力が紀南にも及ぶようになり、大野では不便になったからと考えられています。守護所が置かれた広は紀伊の政治・経済の中心地として、戦国時代をとおして栄えました。



わかやまの知識



【宗祇と連歌】

室町時代盛んだった文芸に、短歌の上の句と下の句を交互に詠んでいく連歌があります。紀伊ゆかりの連歌をたしなんだ人として、心敬と宗祇が知られています。心敬は名草郡田井荘（和歌山市）出身で、京都の十住心院の住職となり、1463（寛正4）年には故郷に帰って『ささめごと』という連歌論を著しています。

心敬に連歌を学んだ1人に宗祇がいます。宗祇は有田郡藤並（有田川町）出身とも言われ、各地をまわって連歌を広めました。宗祇と親しかった人物の1人に、紀伊国の武士湯河政春がいました。宗祇は小松原（御坊市）で湯河政春のために連歌を詠んだと言われています。政春自身も連歌を詠み、その歌は『新撰菟玖波集』という宗祇が編集した連歌集に載せられています。



伝宗祇屋敷跡

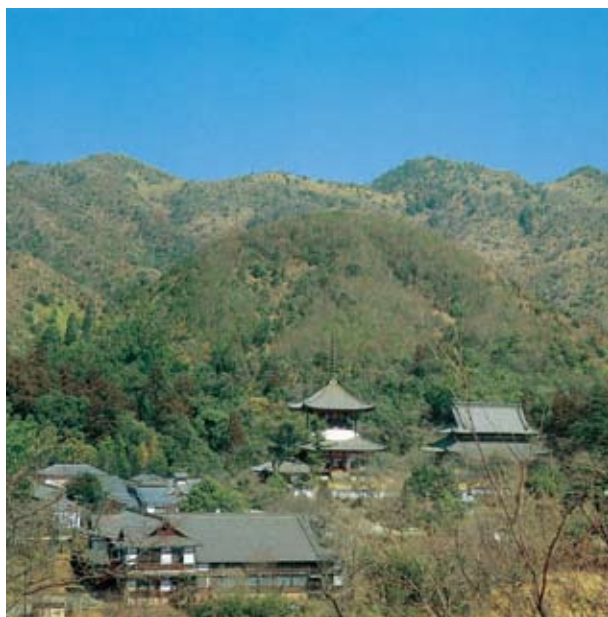
第2章 武士の活躍と信仰



雑賀衆と太田城



時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
	昭和(戦後)・平成時代



根来寺全景（岩出市）

戦国時代の紀伊国

戦国時代の紀伊国では、紀ノ川筋は高野山・粉河寺・根来寺といった寺院が力をもっており、現在の和歌山市周辺は雑賀衆が優勢な地域でした。有田郡は畠山氏、日高郡は湯河氏・玉置氏といった武士が力を競っており、紀南一帯は熊野三山の支配下に入っていました。紀伊国守護の畠山氏は力が弱くて、紀伊国を1つにまとめることができませんでした。

紀伊国は山が深く、海に囲まれているため、攻撃を加える側にとっては、攻めにくかったようです。1573（天正元）年、織田信長に室町幕府を滅ぼされた足利義昭が、一時由良（由良町）の興国寺で暮らしたのも、海によって自由に移動できるだけでなく、けわしい紀

伊国の地形を考えてのことだと考えられます。

戦国時代の紀伊国で、新兵器の鉄砲を自由自在に使って活動したのが、根来寺の僧兵と雑賀衆です。

日本への鉄砲の伝来は、1543（天文12）年といわれていますが、それから10年ほどで、根来は有力な鉄砲の産地となりました。そして、雑賀衆にも鉄砲が伝えられ、根来寺とともに鉄砲で有名になりました。



火縄銃（江戸時代前期 和歌山県立博物館蔵）

織田信長の雑賀攻めと鷲森本願寺

15世紀の後半、本願寺の蓮如が紀伊国で浄土真宗を広めたことから、戦国時代の雑賀には、浄土真宗の信者が多くいました。彼らは、大坂の本願寺と織田信長の間で石山合戦がはじまると、本願寺を助けて戦いました。1576年、本願寺を攻撃した信長に対して、雑賀衆は数千挺といわれる鉄砲で応戦したため、信長が足にけがをするほどの激しい戦いとなりました。この戦いで雑賀衆の中心人物の鈴木孫一は、本願寺方の大将とよばれるほど活躍しました。

織田信長は、勇ましい雑賀衆をそのままにしておいたのでは本願寺を攻略できないと考え、根来寺の僧兵の一部を味方につけて、1577年、雑賀の地を攻めました。中野城や小雑賀（和歌山市）で、雑賀衆と信長軍の攻防戦がくり広げられましたが、信長の圧倒的な軍事力の前に、雑賀衆はいったん降伏しました。

* 1 蓮如が諸国の門徒に信長との戦いを命じ、11年間の合戦となった。

各地の一向一揆がほろぼされ、信長と和睦した大坂の本願寺は、1580年鷺森（和歌山市）に移ってきました。顕如が鷺森を選んだのは、雑賀衆の力を頼ってのことといわれています。

羽柴秀吉の紀伊平定

1582年、織田信長が京都の本能寺で、家臣の明智光秀に殺されました。その光秀も、山崎（京都府）の戦いで羽柴（豊臣）秀吉にほろぼされました。その結果、秀吉が信長の後継者として、全国の統一を進めていきました。このような世の中の大きな変化は、紀伊国にも及びました。信長と結んで雑賀を支配していた鈴木孫一は雑賀から追放され、反秀吉方の土橋春胤が雑賀衆の中心となりました。信長に味方していた根来寺の僧兵も土橋氏ら雑賀衆と同盟を結び、和泉国（大阪府）に出兵して、秀吉と対決することとなったのです。

緊迫した空気が流れる中で、本願寺の顕如は鷺森を去って、貝塚（大阪府）に移りました。これは、本願寺が一揆を指導する時代でなくなったことを示しています。1585年、秀吉は紀伊国に向けて大軍を出発させました。和泉国で秀吉軍を迎え撃った根来寺の僧兵や雑賀衆らは、ひとたまりもなく敗れてしまいました。そのため、根来寺は秀吉軍が来る前に自ら火を放って焼け落ち、雑賀衆はうちわもめを起こしてほろびました。秀吉の目的は信長と違って、紀伊国全体を支配することでしたので、軍は紀南地方にまで進み、新宮の堀内氏も降伏しました。紀伊一国をおおむね平定した秀吉にいどんだのが、太田城（和歌山市）に立てこもった人々です。激しい抵抗の前に、秀吉は太田城を水攻めにしました。太田城は1か月あまり抵抗したのちに降参し、秀吉は農民が一揆を起こさないよう刀狩を行いました。紀伊国は秀吉の弟秀長が支配する国となりました。



秀吉が太田城水攻めのため築いた堤防跡（和歌山市）



わかやまの知識



【戦国時代の紀伊水軍】

戦国時代になると紀伊の水軍の中には、戦国大名に雇われる者が出てきました。関東一帯を支配した戦国大名の後北条氏は、紀伊国出身の梶原氏・安宅氏・愛洲氏・小山氏などを自らの水軍の武将として取り立てました。しかし、梶原氏などは後北条氏の家臣としての収入だけでは生活ができず、紀伊国に帰国したいと申し出て慰留されています。海の上に生活の基盤がある水軍にとって、戦国大名の家臣となるのはつらかったのでしょう。

室町時代から戦国時代にかけて、日本は中国や東南アジア諸国と活発に貿易を行いました。水軍の人々も貿易に参加しましたが、貿易が不調になると武力を利用して海賊行為を行いました。この海賊を倭寇と言います。中国の史料には、倭寇のメンバーとして紀伊の人々が見えますから、紀伊の水軍は東シナ海を渡って、中国にまで行っていたのです。

織田信長は紀伊の水軍に期待し、四国攻めの船を紀伊国で調達しようとしていました。信長の計画は本能寺の変で実現しませんでした。豊臣秀吉も紀伊の水軍に期待しました。紀伊の水軍は秀吉の四国攻め、小田原攻めに続いて朝鮮出兵にも出陣しました。

第2章 武士の活躍と信仰



戦国時代の根来寺



時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
	昭和(戦後)・平成時代

根来寺の僧兵

戦国時代の根来寺は、境内には数多くの寺（坊院）が建ち並び、その勢力は紀北から泉南（大阪府）にまで及んでいました。そして根来寺衆は、「彼らの仕事は常に軍事訓練」を行うことであるとイエズス会の宣教師が書いたように、僧兵集団として知られています。

寺院には仏教の教学を学ぶ学侶（衆徒）と、寺院の実務を執り行う行人（惣分）がありますが、戦国時代の根来寺では、行人の組織が大きな力を持っていました。紀北や泉南の土豪が中心となって行人方の寺院を建て、子供を出家させて住職としていました。この行人が僧兵の主力となりました。

根来寺衆は、雑賀衆とともに鉄砲で有名ですが、室町時代から実力は知られていました。たとえば、1460（長祿4）年には、用水の使用をめぐる守護畠山氏の軍勢と争い、守護方に大きな損害を与えています。また、戦国時代には守護畠山氏とともに河内（大阪府）に出陣し、畠山氏の軍勢の主力部隊として活動しました。

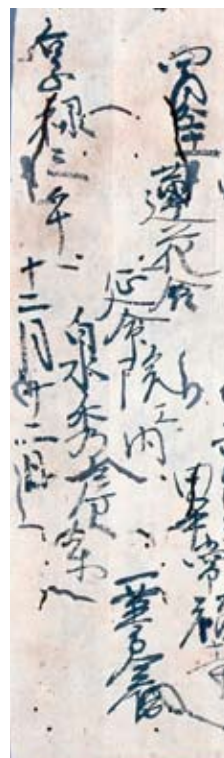
根来寺の発掘調査

根来寺では、1976年から現在までに、およそ約3万4千㎡の発掘調査が行われました。寺院の敷地とされる400程の区画のうち、20%近くを発掘したことになります。水田・畑や宅地となっている区画を発掘すると、1585（天正13）年の戦争で焼けた赤い土があり、建物や井戸の跡が発見できます。そこからは多量の中国や朝鮮の陶磁器、日本各地の陶器や土器、法具、武器、装飾品などが出土し、大変な富が蓄えられていたことがわかります。

13世紀までの根来寺は円明寺を中心とした直径100m程度の範囲でしたが、14世紀以降に多数の寺院が建立されていきます。15世紀には大塔の建築が始まり、舗装道路や多数の礼拝施設が造られ、境内が大規模に整備されました。そして、巨大化する根来寺の生活を支えるため、西坂本は商工業の町となっていきます。漆器や鍛冶の職人のいたことが発掘調査で確認されています。16世紀後半の根来寺は戦いに備えます。西坂本の西に西山城を造り、幅5mの濠で西坂本を囲んでいたようです。前山には土塁が造られ、蓮華谷川の左岸に弓矢・鉄砲戦用の地下壕や物見櫓が設けられました。

行人方寺院「延命院」

1990（平成2）年に「延命院」・「川大夫」と記された根来塗りの椀と皿が出土し、延命院の存在がわかりました。その後、2004年に、1530（享祿3）年から1536（天



古文書に記された蓮花谷延命院内泉秀房

文5)年の間に、根来寺の蓮花谷延命院の泉秀房・泉春房・大武殿という僧が、紀の川市打田付近の土地を買ったときの古文書7通が発見されました。



延命院 川大夫銘の根来塗

延命院の場所やそこで暮らした僧の名前と活動が具体的に
なったのです。土地の売買をする僧は行人で、川大夫はその家
来です。延命院には大勢の人が住んでいたようです。

区画の一部を調査しただけですが、漆器が出土した区画には
地下室が2基、隣の区画には5基見つっています。このあた
りの区画の面積は小さいので、延命院は幾つかの区画で構成さ
れると考えられますが、地下室だらけの寺院と見られます。

地下室の金山寺味噌

根来寺の寺院跡では地下室が多数発見されています。床に容量が250ℓ
以上の大きな甕を据え付けた例も見られますが、大多数の地下室には何
もありません。そのため、地下室の用途はよくわかりませんでした。

ところが、2002年の調査で、地下室で金山寺味噌の入った8個の桶が
発見されました。この地下室の地上部にあった倉には、米・大麦・小麦・
大豆・ヒエ・アワなどの穀物、銭・麻の反物・綿糸などがありました。
米は粒の大きい畑作に適した赤米でした。

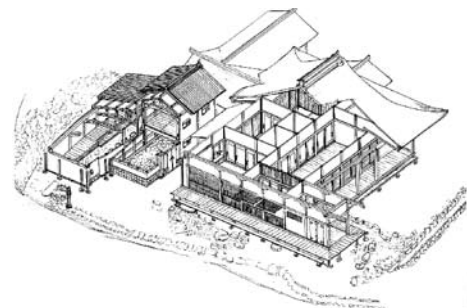


地下室の桶

桶は火災で燃えてしまうことが多かったので、甕のない地下室には桶があった可能性が大きいと考えら
れます。温度の一定した地中や地下は、味噌などの醸造や保存に適しているのです。地下室や地中に甕を埋
めた建物は食品倉と見られます。

遺構から見た行人方寺院と学侶方寺院

円明寺の北で、幅約5mの道路を挟んで建立された二つの寺院
を発掘しました。そこでは、間口30m・奥行15～18mの広さの
敷地に、それぞれ2棟・4棟の食品倉があり、住居に当てる面積
は70㎡程度しかありません。食品倉の数や規模は居住人数に比例
したものと考えられるので、この2つの寺院は敷地一杯に雑然と
建物があり、せまい住居に大勢が暮らしていたと推定でき、行人方寺院の典型例と考えられます。



学侶方寺院の復元図

一方、これとはまったく異なる景観の寺院が、2003年の調査で発見されました。小さな谷をきり広げ、



発見された学侶方寺院

間口30m・奥行30mの敷地とし、北と東に庭園があります。発見さ
れた建物は、書院造りの客殿、石敷床の土蔵と付属屋です。土蔵の
壁や庭園の景石・玉石が残り、客殿は間取りが分かる素晴らしい遺
構でした。客殿には中門廊・広縁・仏間があり、院主の居室には床
ノ間がついています。土蔵には米が納められており、付属屋には甕
を8個並べて埋設しています。大きな敷地や格式高い構造の客殿、
根来寺の発掘例では珍しい庭園があること等から考えて、有力な学
侶方寺院の可能性が高いと思われます。

第2章 武士の活躍と信仰



木食応其と高野山



時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
	昭和(戦後)・平成時代

木食応其と秀吉

木食^{もくじき}応^{おう}其^みは、1585（天正13）年の豊臣^{とよひでよし}秀吉^{しうけい}の高野山^{たかのさん}攻めを中止に導き、高野山を救った僧として知られています。木食とは、穀物^{こくもつ}などを断^たち、草や木の皮などを食べる木食行^{もくじきぎょう}をした僧で、応其は近江^{おうみ}（滋賀県）の出身で、1573年に38歳で高野山へ登りました。

応其の活動が目立ってくるのは、1585年の豊臣秀吉の紀州攻めからです。秀吉軍は根来寺や粉河寺を攻めた後、高野山にむかいました。これに驚いた高野山は、応其を使者にたて降伏しました。その後、応其は秀吉に深く信頼され、応其も秀吉の政策を支える立場となつて、高野山ではなくてはならない存在となつていきま



応其像（興山寺蔵）

す。また、秀吉も高野山を全国的な信仰の場所としての「総菩提所」と位置付けていきました。1586年の大坂城での秀吉との謁見の折に、居並ぶ諸大名の前で、秀吉は応其のことについて、「高野山の木食と思つてはいけない。木食の高野山と思うように。」と発言しています。秀吉は高野山の金堂再建を計画し、そのため高野山に米1万石と寺領として伊都郡と大和国宇智郡の地3,000石を寄進しています。金堂の完成は、1587年で、当時大和（奈良県）や紀伊国の領主であった秀吉の弟秀長が秀吉の名代として落成式に出席しています。高野山麓の橋本はこの時期に合わせて長さ230メートル余りの橋が架けられ、この橋が今日の橋本という地名の起源になったと伝えられています。橋本は、高野山への入り口の町として、河内国や大和国へ通じる水陸交通の要として発展していくことになります。

高野山の組織と寺領

高野山には学侶（伝統的な権威を持つ学問僧）・行人（寺院の庶務や雑務を担当する僧）・聖（他地方へ出向いて信仰を説いて回る僧）の3つのグループがありましたが、応其はいずれにも属さない客僧という立場にありました。山内の地位は学侶が一番高く、行人、聖という順でしたが、実務を担当する行人が次第に力を付けていきました。応其が行人と深い関わりを持っていたので、この後学侶をしのぐ力を持つよ

うになりました。

応其が高野山麓^{しゅうちく}で池の修築^{しゅうしき}などの活動^{はたらき}を集中的に行なうのは1589年の畑谷池^{はたに}（かつらぎ町）をはじめとして、1590年の平谷池^{へいたに}、岩倉池、引の池（橋本市）、安楽川井（紀の川市）などがあります。1591年に高野山領^{けんち}の検地^{けんち}が実施され、秀吉から1万1,000石^{しりょう}の所領^{しりょう}をみとめられ、さらに1591年に1万石を与えられ、おおむね伊都郡^{い と}、那賀郡^{な が}の紀ノ川河南^{か かん}の地、貴志川^{き し}以東^{きりやく}の地の2万1,000石が高野山領となりました。秀吉は亡くなった母親のために高野山に青巖寺^{せいがん じ}を建立し、応其の尽力で1593（文禄2）年に完成しました。青巖寺は、興山寺^{こうざん じ}と合わせて高野山の中心^{しん}的な寺院^{ぶ じ}となりました。現在の金剛峯寺^{こんごう ぶ じ}のある場所^きに東西^{ほう じ}に並んでこの2つの寺院^きがあったのです。秀吉は1594年に高野山に登山し、亡き母親の三回忌^{さんかい}の法事^{ほう じ}を盛大に行ない、能^{ねん}や連歌^{れん が}の催し^{もよ}もしています。

1600（慶長5）年関ヶ原^{かつせん}の合戦^{がっせん}の際^{さい}に、応其は東軍方^{とうぐん ほう}の津城^{つじょう}や大津城^{せつとく}の籠城軍^{ろうじょう せつとく}を説得^{せつとく}して開城^{かいじょう}させたため、徳川家康^{とくがわいえやす}から西軍^{せいぐん}に味方^{あいき}したとの疑い^{ぎい}をかけられました。そのため、応其は、後事^{こうじ}を弟子^{もんじ}の文珠院勢^{ぶんしゅいんせい}誉^よ（行人方^{ぎんじん ほう}）に託^{たく}して、近江国^{おうみ}の飯道山^{はんどうざん}に退^ひいて1608年に73歳^{ぼつ}で没^{ぼつ}しています。

近世の高野山

その後^{そのち}の高野山^{たかのさん}では、文珠院^{ぶんしゅいん}勢^{せい}が徳川家康^{とくがわいえやす}に接近^{せつしん}して行人方^{ぎんじん ほう}の勢力^{しきりき}を伸ばしたため、学侶^{がくりょ}方^{ほう}との争い^{あらそい}を深めました。1601年に徳川家康^{とくがわいえやす}の裁定^{さいてい}で、2万1,000石のうち、学侶方^{がくりょ ほう}9,500石、行人方^{ぎんじん ほう}1万1,500石となりました。また行人方^{ぎんじん ほう}であった青巖寺^{せいがん じ}は、この裁定^{さいてい}により、学侶方^{がくりょ ほう}の中心^{しん}寺院^{ぶ じ}となりました。その後1649（慶安2）年に3代将軍家光^{とうしやうぐう}から東照宮料^{とうしやうぐう}として300石（行人方^{ぎんじん ほう}100石、聖方^{せい ほう}200石）

の寄進^{きしん}を受けて、近世^{きんせい}の高野山寺領^{たかのさん じりやう}が2万1,300石に確定^{かくてん}しました。

学侶方^{がくりょ ほう}と行人方^{ぎんじん ほう}の争い^{あらそい}を裁断^{さいだん}するため、1692（元禄5）年、幕府^{ぶ ぎゅう}の寺社奉行^{おおめつけ}や大目付^{だいめつけ}、目付^{めつけ}など500人余^{あま}が、橋本^{はな}へ来^きました。紀州藩^{きしゅう はん}は警備^{けいび}のため橋本^{はな}へ1,400人余^{あま}、橋本^{はな}から紀伊見峠^{きいみ とうげ}にかけて930人余^{あま}を配置^{ちやう}していたとされます。この裁断^{さいだん}によって行人方^{ぎんじん ほう}の僧^{そう}が、追放^{おいはな}440人余^{あま}、遠島^{えんとう}600人余^{あま}の処分^{しふぶん}が下され、900カ寺^つの行人方^{ぎんじん ほう}寺院^{ぶ じ}が取り潰^{つぶ}しとなり、行人方^{ぎんじん ほう}の勢力^{しきりき}は大きく後退^{こうたい}しました。

高野山^{たかのさん}は近世^{きんせい}の大名^{だいみょう}なみの領地^{りやうち}を持^もっていたので、学侶方^{がくりょ ほう}と行人方^{ぎんじん ほう}の双方^{そうほう}に1649年に江戸^{えど}への在番^{ざいばん}を命^{めい}じられています。これは大名^{だいみょう}の参勤交代^{さんきんこうたい}にあたるものでした。幕府^{ぶ ぎゅう}の寺社奉行^{おおめつけ}の支配^{しはい}を受けたので、幕府^{ぶ ぎゅう}の法令^{ほうれい}なども下達^{げ たつ}されています。ただ、大名^{だいみょう}と違って自前^{じまえ}の家臣^{かしん}団^{だん}を持^もっていなかった^{なかつた}ので、騒動^{そうどう}や一揆^{いっ き}などが起きれば、紀州藩^{きしゅう はん}に頼^{たの}らざるをえませんでした。例えば、1776（安永5）年の高野山寺領^{たかのさん じりやう}の一揆^{いっ き}では、高野山^{たかのさん}の依頼^{いたい}によって紀州藩^{きしゅう はん}は、伊都郡奉行^{い と ぐん ぎやう}の指揮^{し し}の下^{した}に地士^{じ し}（在村^{ざいそん}の武士^{ぶし}）や帯刀人^{たいとうにん}（帯刀^{たいとう}を認め^{とめ}られている農民^{へいみん}）などを派遣^{はけん}しています。



金剛峯寺